福岡工業大学　機関リポジトリ

FITREPO

Title	三好達治戦争詩の考察
Author(s)	徳永 光展
Citation	福岡工業大学研究論集　第49巻 第2号（通巻76号）P65-P68
Issue Date	2017-2
URI	http://hdl.handle.net/11478/550
Right	
Type	Research Paper
Textversion	publisher

Fukuoka Institute of Technology

三好達治戦争詩の考察

徳　永　光　展（社会環境学科）

An Examination of Tatsuji Miyoshi's War Poems

Mitsuhiro TOKUNAGA (Department of Socio-Environmental Studies)

Abstract

Tatsuji Miyoshi wrote more than 90 war poems. In this paper, the author will examine the characteristics of Miyoshi's war poems and, by doing that, clarify his attitude towards World War II. the author will focus on the following three poems as examples: "Celebration Day of the First Victories" ("Daiichi senshō shukujitsu") from *News of Victory Has Come* (*Shōhō itaru*, July 1942); "Children of Japan" ("Nippon no kodomo") from *Kantaku* (*Wooden Clappers in the Cold*, December 1943); and "Korea with the Fragrance of Lilac" ("Lira no hana niou chōsen") from *Kanka eigen* (*Martial Music*, June 1945).

Keywords: *Tatsuji Miyoshi, war poems, ''Celebration Day of the First Victories'', ''Children of Japan'', ''Korea with the Fragrance of Lilac''*

1．緒言

三好達治は，①『捷報いたる』（スタイル社　1942年７月），②『寒柝』（大阪創元社　1943年12月），③『干戈永言』（青磁社　1945年６月）に総数90を超える戦争詩を残しているが，ここでは，３つの詩集それぞれの中から，１つずつを選んで考察しようとするものである。詩の引用は，いずれも『三好達治全詩集　二』（筑摩書房　1970年８月）より抜粋した。

2．「第一戦勝祝日」（『捷報いたる』より）

われ幼きを携えて
この日風疾き巷に出づれば
砂塵まひ
山山に残雪白く
日うららかに
白雲とぶ
わが行く方には
鷗どり街路の上に相群れて
斜めに高く飛びゆくを見る
錯落参差
羽翼白く輝き
彼らみな沈默して飛翔せり
彼ら默して啼かず
しきりに高低し
皷翼しひるがへり
――よき日かな
皇軍すでにハワイを討ち
マニラを奪ひ
香港シンガポールに二度びかの海賊旗を泥土に仆し
かしこに二度び降伏旗翩翻とひるがへり樹つを見る
我ら四方に戦ひ
戰ひ悉く勝てり
見よこの日
烈風の吹きすさぶ巷々に
戰勝の旗は家並の軒にはためき鳴り
鐵橋を轟き渡る機關車の胸にも新らしき小旗は高くかざされたり
聞け今いづこにか遥かに君が代の合唱起り
またいづこにか萬歳のこゑ幾度か繰り返へしとよもすを聞く
而してこの鄙なる山麓海邊の小都市は
いま昂然として彼の胸ふかくその深き呼吸を息づけるなり
――よき日かな

平成28年８月21日受付

風早く
雲飛び残雪彼方にかがよひ
鷗どり錯落参差
凛冽たる気流の高きにありて
沈默し皷翼す

林浩平が述べるようにこの詩が,「愛国詩のご多聞に漏れず，敵を罵倒し自国軍の勝利を讃える手法で綴られたのは明瞭である」[1]が，見ておきたいのは後半部,「――よき日かな／皇軍すでにハワイを討ち／マニラを奪ひ／香港シンガポールに二度びかの海賊旗を泥土に仆し／かしこに二度び降伏旗翩翻とひるがへり樹つを見る／我ら四方に戦い／戦ひ悉く勝てり」という箇所である。戦時下の世相がこのような詩を書かせたのであるが，同じような言い回しが同詩集の中に散見される事実を紹介し，参考に供したい。順序を追っていこう。詩集名をそのまま題名にした「捷報いたる」では「而して明日香港落ち／而して明後日フイリッピンは降らん／シンガポールまた次の日に第三の白旗を掲げんとせるなり」とある。また，続く「アメリカ太平洋艦隊は全滅せり」では，タイトルが詩中に二度現れ，真珠湾攻撃（1941年12月８日）の勝利に胸躍らせる作者，ひいてはその詩の言説を受容するよう迫られる民衆の姿を彷彿とさせる。「昨夜香港落つ」では「見よかしこに彼らの白旗を」,「新嘉坡落つ」でも「一たびかしこに仆れしユニオン・ジャック／二たびここに仆れたり／一たびかしこに掲げられし白旗／二たびここに掲げらる」，といったように「勝った，勝った」の万歳節なのである。当時は，大本営の発表がすべてであり，それ以外に情報に接するツールを国民は持たなかった訳であるから，発表される公式見解を強化する機能を果たす詩に出会っても，現代の読者とは全く異なり違和感は抱かなかったと考えられる。

けれども，これらの詩が戦局とリアルタイムで発表される様子に接した時，即時的には詩が報道の役目をも果たしていた事実に言及したくなると共に，戦局に変化があった場合，これらの詩は生命を持ち続けることができるのであろうかという問題に直面するのである。

我々は今，戦後70年を過ぎた時点に立ってこれらの詩を読んでいる。その結果，三好に戦争責任を覆いかぶせる読みを行うことは容易であるが，当時としては時流に乗るということ＝戦争を鼓舞する詩を書くということであり，さもなくば言論界から身を引くという選択しかなかったことにも思いを馳せる時，上記のような言説が求められていたという事実は少なくとも押さえておかなければならないように考えられる。

３．「日本の子供」（『寒柝』より）

日本の子供
日本の子供
世界一幸福な日本の子供
世界一重い責任と　世界一高い名譽とをになふ日本の子供
正義の戰さにうち勝ち　人道の上に明日の世界をうち建てるもの
日本
日本の子供
世界の地平に輝かしい夜明けをもたらすもの
世界に永遠の平和と　希望と繁榮とを約束するもの
穢れなき一切の明日の日の新らしき出發を剣にかけて保證するもの
日本
日本の子供

日本の子供
日本の子供
君らの雙肩にある責任　君らの頭上にある名譽
ああそは黄金の如く重く　黄金の如くまばゆく輝きたるを知れ
東西南北數千萬粁の戰場に
昨日曠野の草に　わたつみに注がれたる君らの父と兄の血潮は
即ち今日君らの血管に脈うち流るるところの血潮
ああその昨日の正義と勇氣
いかでか明日の日に失われん
日本の子供
日本の子供
世界一重大な使命にむかつて突進する日本の子供！

ナショナリズムが強烈に表出された詩である。作者は「世界一幸福な日本の子供」と言う。なぜならば,「正義の戦さにうち勝ち／人道の上に明日の世界をうち建てるもの」だから，という論理である。このようにして醸成される国粋主義は，日本以外の民族を植民地支配する思想を正当化すると共に，排他的発想とも容易に結びつき，日本以外の諸民族よりも自らが優位な立場にあるという考え方を子供に植え付けていくのである。

子供は強いものが好きである。そのような心の持ち方に迎合するようにして書かれたと述べれば，作者に対して批判めいた言辞となるが,「東西南北数千萬粁の戦場に／昨日曠野の草に／わたつみに注がれたる君らの父と兄の血潮は／即ち今日君らの血管に脈うち流るるところの血潮」という言説が名誉の戦死のイメージとも重なる以上，子供を死に追いやるつもりで執筆したのかという怜悧な反応を後世の読者からは受けざるを得ない宿命を抱えている詩である。

漢字は読めずとも，このような詩を読み聞かせられ，当然のようにして洗脳されていった当時の子供が，敗戦という現実を一体どのように受け止めたかに思いを馳せれば，嘘の詩がまことしやかに朗読されていたことに暗澹たる気

持ちを余儀なくされたのではなかろうか。また，戦争に我が息子を取られた父母にとっては残酷に聞こえた詩だったのではないかと思われる。

4．「リラの花匂ふ朝鮮」（『干戈永言』より）

リラの花匂ふ朝鮮
ポプラの並木高くはるかに
灰色の鶴黄昏の川水にたたずむ朝鮮
白衣の人彼方を歩み
艸青く古墳のつかさつかさを覆へる丘べ
松の根方に黄なる牛繋ぎ放たれて
わがゆく小徑をさまたげし旅の思出
古陵廃寺斷礎龜趺
城あとに蒲公英咲き
鵲はさみしき電柱に翼ををさむ
夕空高く歸る白雲
燈火くらく暮れゆく村々
つひにわが眼底を去る時なし
ああなつかしき朝鮮
いまその山川の若人ら
われらと共に銃を執り
われらと共に剣を磨し
われらと理想を一つにし
われらの敵を敵として
野に山に
はた海原に大空に
大東亞廣袤萬里の外に戰ふ
時は來ぬ
悠久の時はめぐりて
無現の環きはみなき聖なる歴史
新しき誕生の日にのぞみ
大いなる亞細亞の朝は明けんとす
大いなる朝は明けんとして
昧爽の気は清し
かの山川や艸木や
わが眼底を去りやらぬ
白衣の人の逍遥や
ああげにかかる時しも思出いとなつかしき朝鮮
リラの花咲き匂ふ朝鮮！

三好達治は，東京陸軍中央幼年学校本科在学中，1920年４月から半年間，朝鮮・会寧（フェヨン）の工兵第19大隊に赴任している。「リラの花匂ふ朝鮮」はこの時の体験がもとになって生まれた詩であると考えられる。「ああなつかしき朝鮮」,「ああげにかかる時しも思出いとなつかしき朝鮮」という表現が詩の中に見られることが何よりも三好の朝鮮体験を物語っている。

「いまその山川の若人ら／われらと共に銃を執り／われらと共に剣を磨し／われらの敵を敵として」とあることから，植民地化した朝鮮半島の若者が日本軍の一員として戦う様子を賛美する立場がこの詩には明確に見て取れる。「時は来ぬ／悠久の時はめぐりて／無限の環きはみなき聖なる歴史／新しき誕生の日にのぞみ／大いなる亞細亞の朝は明けんとす」，日本が植民地･朝鮮とひとつになって，戦いに挑み，新しい大東亜帝国を作ろうとした行為を正当化する一節である。

5．評価

さて，以上のように見てくると，三好の戦争詩は時局の意向にかなった戦争協力詩，戦争正当化詩との評価を下さなければならなくなる。

このことの是非に関する議論は，戦後当初からあった。桑原武夫は「三好達治君への手紙」と題する一文の中で，自然を歌うことに長けた三好に同情を示しつつ，次のような言葉を贈っている。

> 戦争になつて君も戦争詩を作つたが，君はやはり自然詩人であつた。そうじて，自由をもたぬ日本人が戦争を歌ふとすれば，戦争は天変地異にほかならぬわけであり，自然詩となるのは当然である。君は戦争を，戦果に一喜一憂する一国民としての君のわが身に引きつけ，かくすることによつてこれを実感のうちに歌つた。（この際，プリンス・オヴ・ウェルズ轟沈の報を悲しみをもつて聞いたもののみが，君の戦争責任をいふことができる。）したがつて君のみならず日本の詩人は，ヴィクトール・ユゴーのやうに，またアラゴンのやうに（「世界評論」にのつた嘉納君の断片譯をみたのみだが）戦争の内へ入つて，その悲惨と残忍を描きつゝ，なほかつそれらがより高きものの實現のためには不可避だとし，つまりその戦ひをよしとしてこれを歌ふことはできなかつた。日本の戦争詩の特色として，泥にまじる血，肉片，断末魔のうめき等の文字がないのは，このためである。君のその頃のものに和歌，俳句が多く，すべて文語詩であることも，このことと無関係ではないと思ふ。（文語でも現實は歌へる。たゞ文語はその現實から今のいぶきを消し去る作用をもつてゐる。）[2)]

一方，当時から長い時を経た現時点の評価を代表するものとしては，以下の石原八束による総括を参照せねばなるまい。

> 『捷報いたる』は大戦勃発後，約半歳の間に書かれた戦争詩及び戦時下の時事風俗詩を収める。この大東亜戦争も当初は日本軍の捷報に沸いたから，陸海軍部の報道に国民全体が踊らされ，新聞，雑誌，ラジオなどもそれを誇大に報じて疑わなかった。内地にあってその報道のままに戦争を受取るよりほかはなかった詩人の戦争詩も，だから架空と云えば架空の文字にうずめ

つくされている。この誤りに気付くようになるには，当時の知識人といえども時間がかかったのである。戦争が始まる前はむしろ戦えば敗けると考えて戦争を否定する知識人は多かった。が，開戦当初の捷報がこの知識人一般をも狂わせたのである。三好の詩業にとってもこの詩集がその汚点となり無限の悔恨となったことは云うをまつまい。[3)]

しかしながら，石原は一方的に三好を否定するということには留保が必要だとの見解も同時に示している。

戦争詩を書いたことが三好の最大の汚点であることは確かですが，それは三好がかつて陸士で同じ釜の飯を食べた仲間達が，理屈はともかくとして，純真に国家のために命を捧げている，一度は軍人として国に命を捧げてもいいと考えた自分としては，国家が命運を賭けて戦争をしている以上，できるだけのことはしなければいけない，ということだったのではないでしょうか。[4)]

この揺れ幅の中に個々の詩を置いて，彼の詩を検討することが必要であるように思われる。1900年８月生まれであった三好のライフヒストリーを生い立ちから俯瞰すれば，1915年９月，大阪陸軍地方幼年学校入学，1918年７月，東京陸軍中央幼年学校本科入学，1920年４月から半年間，朝鮮・会寧の工兵第19大隊に赴任。帰国後，陸軍士官学校に入学するが翌年退学[5)]という履歴が浮かび上がってくる。多感な10代後半から20過ぎまでの６年余りを軍人として教育された事実は，三好の思想を語る上で無視はできまい。

また，金相度は，三好達治の「戦争詩に見られる政治性」として「排外主義」，「自国優越主義」，「大東亜共栄圏の構想」を掲げている[6)]が，それらの要素はここで言及した詩にも当てはまることであり，これらの諸研究の達成に学びつつ，三好と他の戦争詩を執筆した詩人との共通点や相違点に関する考察が課題となってくるのである。

６．結語

上記で取り上げた３つの詩は，日本軍が勝ち進んでいるという前提でなら読めるが，「一体三好達治のような詩人は，日本が敗北したときはどうなるのであろうかと考えた。」[7)]という声が出るのは当然であり，「三好達治にとって，戦時中の自己の試作と，戦後の荒廃した日本の現実が，遠い異国のこととなったように，その時，私にとって，彼の詩は，彼の精神の遍歴の曲折と痛ましい昂揚はよく理解はできながらも，すでに他人のものとなっていた。」[8)]また，「いくさといふものを丸呑にしたやうなこの試歌はわたしを当惑させた。」[9)]という戸惑いが戦後に生じたのも当然である。

けれども，時局の特殊性を考慮に入れて再考した時，そのようにしか表現できない言論人の姿もまた鮮明に見えてくるに違いない。

註

1）林浩平「三好達治と戦争――愛国詩を読み直す――」，小野寺優『道の手帖　作家と戦争』河出書房新社　2011年６月　59頁

2）桑原武夫『現代日本文化の反省』白日書院　1947年５月　59頁

3）石原八束『駱駝の瘤にまたがって――三好達治伝――』新潮社　1987年12月　195頁

4）江口敏『志に生きる！――昭和傑物伝――』清流出版　2003年11月　256-257頁

5）安藤元雄，大岡信，中村稔監修『現代詩大事典』三省堂　2008年２月　640-641頁　國中治執筆

6）金相度「三好達治文学における政治性と詩観――朝鮮の放浪詩人・金笠批評を通して――」大阪外国語大学大学院言語社会研究科博士学位申請論文　2005年12月　128-138頁

7）鮎川信夫「三好達治――逃避幻想の詩人――」，引用は『現代詩文庫　1038　三好達治』思潮社　1989年７月　132頁による。

8）高橋和巳「三好達治――詩人との出会いと別れ――」，引用は註７）に同じ。139頁

9）石川淳「三好達治」，引用は註７）に同じ。143頁